

第六十三回  
(二〇二二年度)

晩翠わかば賞  
晩翠あおば賞

とどけてください  
あなたの詩

---

# 晩翠わかば賞

## 線こう花火

風からまもった

火のついた丸い玉

うごいていた

よこにのびて

たてにのびて

ふしぎな形

まるで生きているみたい

それは小さなたいよう

赤と黄色のまじった色

ぼわんと大きくなった

パチパチ パラパラ

小さなかみなりを出した

パチパチ パラパラ

パチパチ パラパラ

まっ赤になって

大きくなった たいようから

たくさんのかみなりが出る

まわりの空気が

まっ赤になった

ぎざぎざにすすむ

まぶしい光たち



ちばきら

宮城県登米市立上沼小学校二年

パチパチ パラパラ

パチパチ パラパラ

パチパチ パラパラ

小さなたいようは

だんだん小さくなった

まっ赤なままで

パチパチ パラパラ

パチパチ パラパラ

パラ

(詩集「登米」第五十五集)

# 晩翠あおば賞

## かき氷

甘い香りに包まれて  
頭の先を赤く染めた私は  
細いスプーンにつつかれて  
踊るように体を揺らした  
私の体を運ぶスプーン  
頭上の口がうれしそうに笑う  
私を食べるときの  
誰かの笑顔が  
私の笑顔を誘うのだ



鈴木朋花

宮城県仙台市立八軒中学校一年

ガラスのふちに寄りかかるスプーン  
時間が経つにつれ傾いていく  
体が溶けるのを待つだけの  
器の底で静かにまどろむ  
カラシ  
スプーンが倒れた  
夏が溶け切る

## 晩翠わかば賞 優秀賞

### ただ今工事真つ最中

宮城県南三陸町立伊里前小学校五年

佐藤 倅桜

「きもい」  
ふざけて言った言葉だろうけど  
たった三文字の言葉が  
私に噛みついた  
変わりたい

大人の歯が生えそろうのを待つて  
私の矯正は始まった  
みんなの力を借りて  
目指すはきれいなアーチ型の歯  
きれいなアーチ型の橋を  
信らいてできる工事者に依らした  
どんな工ていなんだろう  
心配と楽しみが行ったり来たり

本日着工します  
白いまぶしい光の中  
最初の機器で測量  
リズミカルな  
音楽に合わせてカメラが回る

三百六十度 橋の全体が丸見えだ  
橋の土台 確認よし

次は足場を組む  
ボンド ブラケット持ってきて  
それに針金も  
材料が次々と運ばれてくる  
少し怖い気持ちわいてくる  
そんなことはほっといて  
今日は忙しく現場が動く  
がちりと組まれた足場  
橋の強度 安全確認よし  
まだまだ工事は始まったばかり  
ただ今工事真つ最中

いつの間にか  
私の心は晴れていた  
またいやな言葉に噛みつかれたって  
今の私なら大じょうぶ  
思いつき口を開けて  
「いーん」  
って見せつけてやる  
もう完成が待ちきれない

〔作文宮城〕七十号

### ふしぎなはっぱ

宮城県登米市立上沼小学校二年

すがわら さと

ふしぎなはっぱ  
学校のうらで ひろったよ

ふしぎなはっぱ  
それは まるで 電車のレール  
まっすぐな線が 二本あるから  
茶色のかもつれっ車が 走るよ

ふしぎなはっぱ  
それは まるで 星空

丸い小さな点が たくさんあるから  
たいように すかして見たら  
たくさん光が 出てきたよ

ふしぎなはっぱ  
それは まるで じごくのきれいなかべ  
赤や茶色の火が もえている  
行ったことないけどね

ふしぎなはっぱ  
それは まるで 時間の海  
古いこい茶色い水が 広がる  
ずっとあったのかな  
大むかしから

ふしぎなはっぱ  
それは まるで 時空のあな  
いろいろな色が まわりにちらばっている  
あなに すいこまれそうだよ

ふしぎなはっぱ  
広がる 広がる  
わたしのそうぞう

(詩集「登米」第五十五集)

## いきる

宮城県登米市立米山東小学校六年

三上 真央

「いきる」とは何か  
私は分からない  
意味もよく分からない  
けれど  
私は生きている

ある夜  
お父さんが言った  
「おじいちゃんが亡くなった。」  
聞いたとたん  
頭が真っ白になった

呼吸ができない  
苦しい

心臓が押しつぶされそうになる  
意味がよく理解できない  
考えることができなくなる

隣で兄が泣いていた  
私は放心状態だった  
けれど

気が付くとなみだがあふれていた

「いきる」とは  
こういうことなのか

おじいちゃんからの  
最後の手紙

入院中に書いてくれた手紙

ふるえている文字

泣いた

手紙を読んで

ひたすら泣いた

「いきる」とは

こういうことなのか

おじいちゃんが好きな紙飛行機

きれいに折った

しわ一つない紙飛行機

公園で飛ばした

きれいに飛んだ

白鳥のように空をまう

大きなつばさで

圧とう的な存在で空をかける  
その姿は

生き生きとしている  
「いきる」とは  
こういうことなのか

あの日

無理して書いてくれた手紙

あの日

大空をまっただ紙飛行機

いつも心の中にある

「いきる」とは

こういうことなのか

おじいちゃんは

ずっと私たちのことを

見ているんだな

私たちは

ずっと愛をもらい続けているんだな

「いきる」とは何か

私は少し知っている

少しだけ

(詩集「登米」第五十五集)

## 晩翠わかば賞 佳作

### 私の宝物

宮城県石巻市立稲井小学校三年

小高 瑚乃美

私には 姉と二人の兄がいる

姉は やさしくてがんばりやさん

小さい子のめんどうを見るのがとく

兄は 運動しんけいがよい

走るのがとっても速い

もう一人の兄は すごくあまえんぼう

いつもにこにこしている

姉と兄たちには たくさんのお友達がいる

保育園のころからの友だち

集まるときは「おひさま会」という

①おんなじ心が よりそって

②ひをおうごとに ふかまった

③さいこうの 仲間たち

④まえを向き

⑤かんしゃの気持ちを わすれずに

⑥いつもにっこりおひさま会

私は その仲間にたくさん遊んでもらった  
めんどうを見てもらった

私の手本になってくれるやさしい仲間たち

姉と兄が小学校をそつ業する年

おひさま会の仲間が おいおいしてくれた

手作りのそつ業しよう書

私は姉と兄にあったことがない

十年前の東日本大しんさいで

三人は 命をなくしてしまったから

姉や兄たちの話を聞くと会いたくなる

話してみたかった

遊びたかった

いっしょに出かけたかった

でも 姉と兄たちは

やさしさあふれる仲間をのこしてくれた

楽しいときも 苦しいときも

私のそばにいてくれる仲間

お姉ちゃん お兄ちゃん

ありがとう

おひさま会の仲間は 大切な宝物

お姉ちゃんとお兄ちゃんは

いつも私のそばにいる

私は お姉ちゃんとお兄ちゃんの分まで

一生けん命生きるからね

〔作文宮城〕七十号

### 大きくなったぼく

宮城県美里町立青生小学校三年

今野 琉生

ぼくのせはいつのびる

ねているときにのびるのかな

「ニヨキ」って音がするのかな

せがのびるところを見てみたい

ねないで見たら分かるかな

ぼくの体重はいつふえる

ごはんを食べているときにふえるのかな

「ボン」って音がするのかな

体重がふえるところを見てみたい

ずっと体重計に乗っていたら

分かるかな

朝起きてかがみを見た

今日はどこが大きくなったかな

かがみの中のぼくとにらめっこ

でもきのうとどこもかわらない

そしたら後ろからお兄ちゃんが

「心が大きくなったんだよ」

と教えてくれた

知らないうちにぼくはまた大きくなる

〔作文宮城〕七十号

## 春の日に

宮城県登米市立上沼小学校二年

及川 ゆうと

晴れた 春の日  
青空に きれいな白い雲  
こっちは サイみたい  
そっちは ライオンだ  
あっちは サメ  
おばあちゃんに 教えたよ  
「本当だね。」  
あったかい おばあちゃんの声

何だろう  
たいようの光で 白く光る  
木のえだ いっぱいの花  
たいようみたいに ぎざぎざ  
まるで 風をおよぐ 白いクラゲ  
この花の名前は なあに  
おばあちゃんに 聞いたよ  
「こぶしだよ。」  
やさしい おばあちゃんの声  
もう一ど 花を見た  
ぴったりだ こぶしという名前  
本当だね おばあちゃん

晴れた 春の日

明るく 白く 光っていたよ

おばあちゃんと見つけた 雲と花

(詩集「登米」第五十五集)

## 十五夜

宮城県登米市立豊里小学校四年

横尾 香月

十五夜の  
まあるい月が出た夜は  
まんまるおだんご  
サラサラすすき

十五夜の  
まあるい月が出た夜は  
みんなの家がさわがしく  
明るい声がひびいてる

十五夜の  
まあるい月が出た夜は  
みように明るく  
なんだかこわい  
静かな夜がやっときて  
月がわたしを  
こわい目で見始めた

(詩集「登米」第五十五集)

## 海との戦い

宮城県登米市立佐沼小学校六年

三野宮 智久

ザア

ザア

ザブーン

どんどんどんどん押し寄せる

まるで戦っているようだ

父と二人で海を見つめ

今か今かと待ち続ける

父から三つのことを教わった

「根気強く待つことだぞ。」

「海づりはウキを付けず、重りというのを付けるんだぞ。」

「海は深いから魚が活動しやすい。」

ザア

ザア

ザブーン

どんどんどんどん押し寄せる

びくっびくっさおが引かれる

(来たぞ。)

引き上げたい気持ちをおさえてぐっと待つ

びくっびくっ大きな引き

(食べている。)

(今だ。)

さおが折れそうなくらいに曲がっている

ぼくは全力でリールを巻く

どんどんどんどん近づいてくる

最後の力をふりしぼり引き上げる

二十センチほどの大きなハゼが顔を出した

バケツに入れたけどとび出した

ぼくも父もにっこりした

「根気が一番。」

父の言葉が頭にしみわたる

ザア

ザア

ザブーン

どんどん押し寄せる

ザア

ザア

ザブーン

どんどん押し寄せる

波は絶え間なく生まれては消え

ゆっくり深い海へ落ちてゆく

(詩集「登米」第五十五集)

## いっしょの一人

青森県八戸市立大久喜小学校四年

瀧川 唯人

ぼくの学校

四年生は二人だけ

ぼくのと年には友だち 一人

授業のとき相談する人 一人

こまったとき教えてくれる人 一人

いつも楽しい人 一人

小さいときからいっしょの人 一人

たくさんおしゃべりしてくれる人 一人

思いやりのあるきみは大事な人 一人

(「花園」第六十号)

## 晩翠あおば賞 優秀賞

### 一度きりのコンクール 十二分間の「宇宙の音楽」

宮城県仙台市立向陽台中学校三年

和田 祐佳

よく晴れた夏の日  
蒸し暑い武道館で  
後ろの扉から  
生ぬるい風がふくころ  
先生の右手が動きだした  
その瞬間から 私のすべては  
その為だけに働き出す  
あたりは暗く  
何もない空間がひろがる  
不意に爆発音が暗闇に響いた  
それは世界のすべてを創造し  
混沌の中へといざなうてゆく  
時は流れ  
舞台は一つの星へと移った  
必然である偶然から  
生まれた孤独なこの星は  
今日も仲間を探し求めている

水星・金星・地球・月・火星・木星  
六つの星が

それぞれ固有の音を発し  
絶え間なく「宇宙の音楽」を  
紡ぎ奏でていく

私は夢を見ているのだ

この楽器に

この仲間に

この音楽に出会えたこと

あの舞台で吹けること

すべて私の夢だ

目が覚めたら すべては消え去る

ならば

目が覚めるまで 夢を見続ける為

私は息を吸い 楽器を吹く

壮大で儂く美しい

宇宙のような

宇宙そのものの音楽

それは

それは

華やかにエンディングを迎える

その瞬間に

私は

この世界に帰ってきた

蝉の鳴く声が聞こえる

夏はまだ終わらない

私達五十人で過ごした最後の夏

終幕（フィナーレ）を迎えるに相応しい演奏を

私達の三年分の夏は

明日の十二分間の為に

（「こだま」六十六号）

## 鳥

宮城県仙台市立錦ヶ丘中学校二年

大山 榛菜

光り輝け

さあ  
鳥よ

さあ 鳥よ

永遠に広がる青に

貴方のその翼を広げ

踊りながら飛びこんでゆけ

時には音と一緒に駆け抜け

時には山々の猛者となり

時には澄みきった声で歌う

そんな貴方は

神のふところ

自由と一緒に

育まれたのだ

高く 高く

宇宙の果てまで

すべてを知りつくしたその翼で

永遠の旅へ出かけていけば

さあ 鳥よ

宣誓を叫べ

## 晩翠あおば賞 佳作

### 夏の時間

宮城県仙台市立幸町中学校三年

桜井 俊輔

(「こだま」六十六号)

今、国語の授業をうけているのだがただの子  
守唄にしか聞こえない

この時間が幸せすぎるから

開いた窓から風が入ってきて

パラパラと教科書をめくる

なんて心地のいい音なんだ

何人かの生徒が今にも寝てしまいそう

みんなうとうとしている

さっきはプールの授業だったから

教室からほんのり香りがする

プールの塩素の香り

毎年来る夏の香り

先生が教科書の詩を読んでいる

りんとしていて

いつも聞いている優しい声

僕に考えさせるのをやめさせるくらい  
うつくしい時間は体にとけていく  
ずっとこうしていたい

でも中学三年間で最後の夏  
卒業したらもう感じる事はできない  
ずっとこうしていたいのに

だから噛み締める  
うつくしくて切ないこの夏を  
幸せなこの夏を

(個人応募)

## 友達

宮城県仙台市立五橋中学校三年

濱田 幹大

友達との別れの握手は、忘れないだろう  
広瀬川の川岸で  
「頑張ろう」の  
言葉、なしで  
互いの心、伝え合った  
強く結んだ  
手と手を通して  
またいつかどこかで会えますようにと  
願いを込めて

友達との別れの顔は  
夢と希望であふれていた  
広瀬川の川岸で  
「また会おう」の  
言葉、なしで  
互いの心、伝え合った  
夢いっぱい輝く  
目と目を通して  
またいつかどこかで会えますようにと  
願いを込めて

友達との別れのキャッチボールは  
一球一球が重かった  
広瀬川の川岸で

「野球、頑張れよ」の  
言葉、なしで  
伝えた  
泥で汚れた  
野球のボールを通して  
悲しい別れをクラブで受け止めながら  
またいつかどこかで会えると  
信じて

(「こだま」六十六号)

## 台風

宮城県仙台市立広瀬中学校一年

兼下 花

生まれは赤道

南の海

強い太陽照りつけて

上昇気流に育てられ

大きくなった発達期

僕の名は台風

特技は回転

右回り

生まれた赤道後にして

北に向かって旅に出る

激しくあばれる最盛期

僕の名は台風

たどり着いたは

北の国

寒気で気持ちも冷やされて

摩擦で勢い弱められ

優しくなった衰退期

僕は温帯低気圧

## ここにいろよ

宮城県気仙沼市立唐桑中学校三年

吉田 美咲

君のいない教室は

雪が降らない冬みたい

ただ寒いだけで 凍えて過ごした

どんと祭で 一緒に食べたイチゴ飴

「甘いね」 「すっぱいよ」

甘ずっぱいあの味を

君も 時々思い出してくれているのかな

君のいない部室は

桜が咲かない春みたい

君の笑い声が 遠くでかすかに耳に残る

隣で肩を並べて歩いた廊下

ちよっとふざけたら

すぐ壁にぶつかっただのに

一人で歩くと こんなに広がったのか

あの頃に戻りたい

君の震える心を

温めてあげられたらいいのにな

暑いのが苦手と分かっているから

体育館脇の イチヨウの葉っぱが

黄色くなったら

君の笑顔が またここに來れますように

大丈夫だよ 私がいるよ

「ここにいろよ」

(学校応募)

(「こだま」六十六号)

## 晩翠わかば賞・晩翠あおば賞 選評

第六十三回「晩翠わかば賞」(小学生対象)と「晩翠あおば賞」(中学生対象)には、東北地方から、わかば賞へ五二五編、あおば賞へ七十八編の詩が寄せられました。

みなさんの作品を拝見して、詩を書くことの楽しさが伝わってまいりました。良い詩には読む人の心をひきつける大きな力があります。詩や文章をたくさん読みながら、良い表現にいつも親しむ毎日を送っていただきたいとあらためて願っています。

晩翠わかば賞に選ばれた、ちばきらさんの「線こう花火」は、楽しくのびのびと場面がとらえられていて、とても新鮮に感動が伝わってまいりました。「よこにのびて／たてにのびて／ふしぎな形／まるで生きているみたい」。躍動感が感じられました。気持ちが生きて伝わってきます。まずは、はじまり方で、読む人の心をぐっとつかんでいます。おわり方も素晴らしいです。「小さなたいようは／だんだん小さくなった／まっ赤なままで／パチパチ パラパラ／パチパチ パラパラ／パラ」。最後の「パラ」という音の響きに、細かなところまできちんと聞き取っていかうとする姿が見えてきました。

佐藤倅桜さんの「ただ今工事真っ最中」は、

とてもしっかりとした書き方で、視点がユニークな作品でした。物の見方やとらえ方を少し変えるだけで、前向きな考え方をすることができているのが良く分かりました。すがわらさとさんの「ふしぎなはっぱ」は、一枚の葉から広がっていく様々な想像世界を豊かに描き切っています。三上真央さんの「いきる」は、祖父との別れの場面を丁寧に描いていて、読む側の心を打つ言葉に溢れていました。佳作に選ばれた作品もそれぞれ良いものばかりでした。毎日の発見と感動がそれぞれに分かりました。

晩翠あおば賞に選ばれた、鈴木朋花さんの「かき氷」は、見事な擬人化の手法に満ちた作品でした。「甘い香りに包まれて／頭の先を赤く染めた私は／細いスプーンにつつかれて／踊るように体を揺らした」。色鮮やかな印象とユニークさ、リズムの良さが伝わってきました。「私は／器の底で静かにまどろむ／カラ／スプーンが倒れた／夏が溶け切る」。スプーンの音が鋭く聞こえてくるかのようです。最後のまとめ方に余韻を感じました。

和田祐佳さんの「一度きりのコンクール 十二分間の、宇宙の音楽」はとても広がりのある作品で、正に言葉の交響楽という印象でした。青春のかけがえのなさを感じました。大山榛菜さんの「鳥」は、呼びかける形で描かれていて、力強さと深さを感じさせる作品でした。佳作にも力作が集まりました。みずみずしい心が伝わっ

てきました。これからも良い作品とたくさん出会って下さい。そして様々な思いを、一つ一つ言葉に綴っていきましょう。

### 晩翠わかば賞・晩翠あおば賞選考委員

梶原 さい子 (歌人)  
佐々木 洋一 (詩人)  
高野 ムツオ (俳人)  
とよたかずひこ (絵本作家)  
和合 亮一 (詩人)  
(五十音順)

◎学校・学年は作品執筆時のものです。

【晩翠わかば賞・晩翠あおば賞】  
本賞は左記の規定により、すぐれた作品をあらわした方に贈る。

対象：東北地方および仙台市内姉妹都市の小・中学生による詩作品

①個人での応募 (一人五編以内)

②学校・団体での応募 (令和三年九月から令和四年八月までに発行された学校文集、詩集、機関紙等でも可)  
※仙台市内姉妹都市：北海道白老町、長野県中野市、徳島県徳島市、大分県竹田市、愛媛県宇和島市

応募締切：令和四年八月三十一日

主催：仙台市、仙台文学館(公財) 仙台市民文化事業団

## 晩翠児童賞受賞者 (第1回～第47回)

回 数	年 度	受 賞 者 名	年 齢	所 属 地
1	昭和35年	日 下 部 政 利	小5	(福島県)
2	36年	鈴 木 茂	小3	(福島県)
3	37年	石 森 明 夫	小4	(福島県)
4	38年	菱 沼 紀 子	小5	(宮城県)
5	39年	小 俣 佳 子	小5	(福島県)
6	40年	中 村 喜 代 子	小6	(宮城県)
7	41年	佐 藤 起 恵 子	小5	(福島県)
8	42年	熊 谷 き ぬ 江	小3	(宮城県)
9	43年	子 玉 智 明	小4	(宮城県)
10	44年	佐 藤 裕 幸	小5	(宮城県)
11	45年	武 田 忠 信	小6	(福島県)
12	46年	鈴 木 次 男	小4	(宮城県)
13	47年	伊 藤 律 子	小6	(宮城県)
14	48年	荒 屋 敷 良 子	小3	(青森県)
15	49年	石 井 ま り 子	小6	(福島県)
16	50年	伊 藤 郁 子	小5	(宮城県)
17	51年	阿 部 朋 美	小1	(宮城県)
18	52年	関 口 順 子	小6	(宮城県)
19	53年	いとよ ひであき	小1	(青森県)
20	54年	も ぎ ま さ き	小1	(宮城県)
21	55年	白 岩 登 世 司	小3	(宮城県)
22	56年	阿 部 ゆ か	小5	(福島県)
23	57年	浜 野 勝 郎	小6	(福島県)
24	58年	ま き と も ゆ き	小1	(青森県)
25	59年	高 柳 佳 絵	小4	(宮城県)
26	60年	小 川 宗 義	小1	(岩手県)
27	61年	菅 原 結 美	小5	(岩手県)
28	62年	荒 川 麻 衣 子	小5	(岩手県)
29	63年	佐 藤 直 樹	小4	(岩手県)
30	平成元年	氏 家 武 紀	小6	(宮城県)
31	2年	あ お き と し み ち	小1	(青森県)
32	3年	井 面 咲 恵	小4	(岩手県)
33	4年	菊 池 薫	小2	(岩手県)
34	5年	千 葉 克 弘	小6	(宮城県)
35	6年	高 橋 敦 子	小6	(宮城県)
36	7年	いわぶち だ い ち	小1	(宮城県)
37	8年	佐 藤 美 恵	小6	(宮城県)
38	9年	むらやま あ す か	小1	(宮城県)
39	10年	大 内 雅 友	小3	(福島県)
40	11年	ひ で ゆ り か	小2	(宮城県)
41	12年	あ べ き よ ひ ろ	小1	(宮城県)
42	13年	千 葉 明 弘	小4	(宮城県)
43	14年	や ま だ ま お	小1	(宮城県)
44	15年	遠 藤 め ぐ み	小6	(宮城県)
45	16年	千 葉 未 来	小6	(宮城県)
46	17年	千 葉 雅 人	小3	(宮城県)
47	18年	千 葉 颯 一 朗	小3	(宮城県)

晩翠わかば賞・晩翠あおば賞受賞者（第48回～第63回）

回数	年度	受賞者名				
48	19年	わかば賞	佐々木	里緒	小1	(宮城県)
〃	〃	あおば賞	菅原	遼	中3	(宮城県)
49	20年	わかば賞	大和田	千聖	小2	(宮城県)
〃	〃	あおば賞	(該当作なし)			
50	21年	わかば賞	阿部	仁美	小5	(宮城県)
〃	〃	あおば賞	高橋	真彩	中3	(宮城県)
51	22年	わかば賞	たかはし	れいか	小1	(宮城県)
〃	〃	あおば賞	菅原	奏	中3	(宮城県)
52	23年	わかば賞	福士	湧太	小4	(青森県)
〃	〃	あおば賞	岡崎	史歩	中3	(宮城県)
53	24年	わかば賞	本郷	祈和人	小3	(宮城県)
〃	〃	あおば賞	佐々木	凌雅	中3	(宮城県)
54	25年	わかば賞	熊谷	真響	小4	(宮城県)
〃	〃	あおば賞	金森	悠夏	中2	(宮城県)
55	26年	わかば賞	さとう	ゆうのすけ	小2	(宮城県)
〃	〃	あおば賞	金森	悠夏	中3	(宮城県)
56	27年	わかば賞	すずき	まきと	小1	(宮城県)
〃	〃	あおば賞	漆澤	好美	中2	(岩手県)
57	28年	わかば賞	高橋	大翔	小6	(宮城県)
〃	〃	あおば賞	井上	彩	小6	(宮城県)
58	29年	わかば賞	高橋	夢叶	小3	(宮城県)
〃	〃	あおば賞	高野	慈	中1	(宮城県)
59	30年	わかば賞	いとう	りおな	小1	(宮城県)
〃	〃	あおば賞	小川	倫花	中1	(宮城県)
60	令和元年	わかば賞	おくだ	りさと	小1	(宮城県)
〃	〃	あおば賞	大久保	観	中2	(宮城県)
61	2年	わかば賞	田中	はじめ	小3	(宮城県)
〃	〃	あおば賞	菅野	一彩	中3	(宮城県)
62	3年	わかば賞	やまと	けいしん	小1	(宮城県)
〃	〃	あおば賞	佐藤	雛	中3	(宮城県)
63	4年	わかば賞	ちば	きら	小2	(宮城県)
〃	〃	あおば賞	鈴木	朋花	中1	(宮城県)

発行／2022年10月

主催／仙台市、仙台文学館（公益財団法人 仙台市市民文化事業団）

後援／宮城県教育委員会、仙台市教育委員会、 河北新報社、朝日新聞仙台総局、  
読売新聞東北総局、毎日新聞仙台支局、産経新聞東北総局、共同通信社仙台支社、  
時事通信社仙台支社、**NHK** 仙台放送局、**TBC** 東北放送、 仙台放送、  
**三洋電機**、**khb** 東日本放送、**エフエム仙台**

仙台文学館 〒981-0902 仙台市青葉区北根二丁目7-1 電話 022-271-3020

ど い ぼん すい  
土井 晩 翠

明治4(1871)年～  
昭和27(1952)年



詩人・英文学者。仙台市出身。詩集『天地有情』、翻訳書など多くの著作を残す。晩翠作詞の唱歌「荒城の月」(作曲・滝廉太郎)は、現在でも広く親しまれている名曲。また、全国各地の校歌の作詞も多数手がけている。